

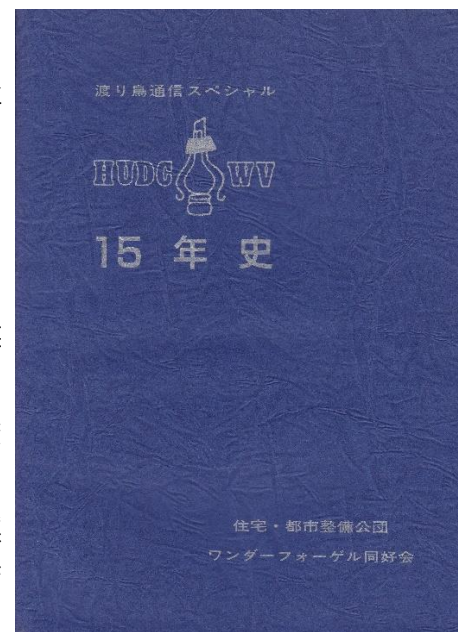
「日本百名山」から「世界百名山」へ

室井 隆良

4月7日に新型コロナ緊急事態宣言が出て外出自粛の引き籠もり生活、狭い仕事場で書棚の整理などして過ごしていましたが、5月18日にはコロナウィルス感染防止のため今年の夏の富士山閉山までがニュースになり、書棚の一角を占めている山の本に眼が移って、それからは気になる山の本を時々読み直しながらの整理作業になりました。

1. 山の本を並べて瞑想に耽る（その1）

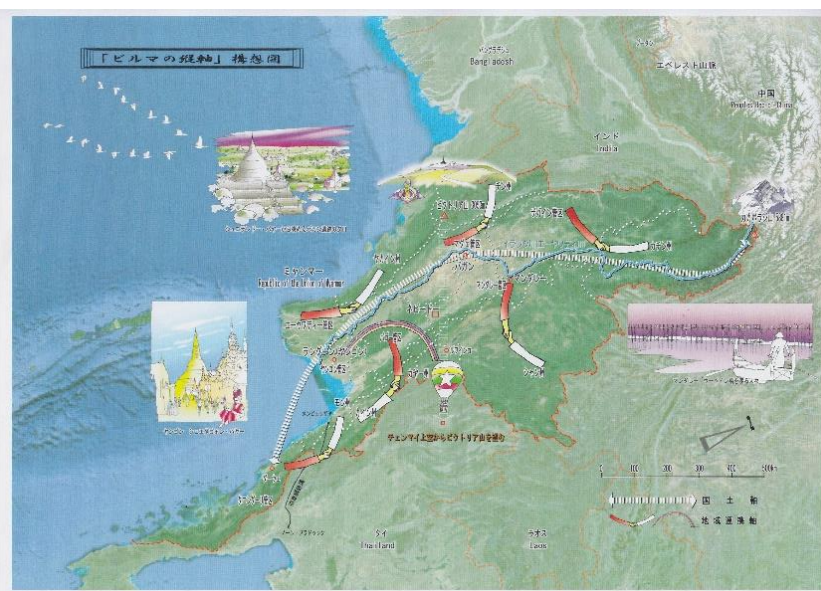
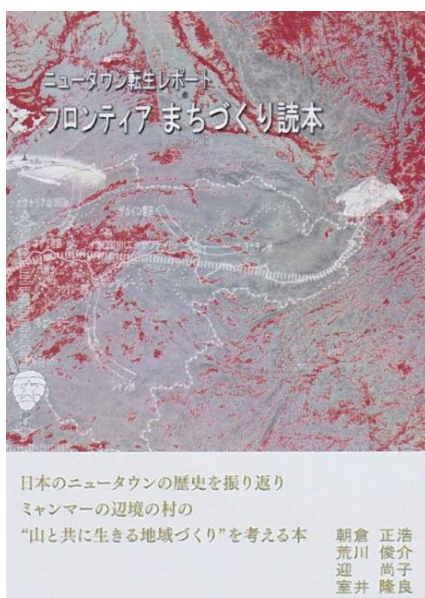
1973年3月16日、多摩ニュータウンで誕生した日本住宅公団ワンダーフォーゲル同好会が設立15周年を迎えた1988年、会の機関紙「渡り鳥通信」も既に400号を超え、飛翔記録をまとめた「15年史」を作成しました。10周年の1983年6月は多摩センター駅前の施設での記念パーティーでしたが、15周年は最初の記録誌＝山の本の作成です。そして20周年から海外遠征登山がスタートし、最初の山が1993年12月のキリマンジャロ、海外遠征登山はその後も続いています。「15年史」の最終ページに「イラストマップ日本百名山」を綴じ込んでいます。当時の山の雑誌「山と溪谷」の中にあったものをコピーし、同好会が15年間で登った百名山58座に★印をつけて知らせています。



2016年11月に出版した「ストーリーマップー語りかける地図一」には、15年史のイラストマップを古地図に見えるようにデザインアップして載せています。

山の本が並び書棚の一番端にある2冊の本「フロンティアまちづくり読本」と「ストーリーマップ」は、ふろんていあタウン工房が出版した本です。売れ残り本の段ボールを床に積み重ね、仕事部屋は足の踏み場もない状態です（笑）。

ワンダーフォーゲル同好会の設立40周年記念ミャンマー・ビクトリア山登山がきっかけになって、ワンゲル仲間が中心になって2014年6月に設立したふろんていあタウン工房、1冊目の「まちづくり読本」は、NPO法人設立前の2月発刊で本の帯には「日本のニュータウンの歴史を振り返り、ミャンマーの辺境の村の“山と共に生きる地域づくり”を考える本」と書かれています。国土計画の夢を描いた「ビルマの縦軸構想図」を載せています。ミャンマー中央部を流れるイラワジ川（今のエーヤワディー川）、昔から人々の生活を支えてきた肥沃な土地を貫いて流れる川は、歴史が造り上げた国の基幹となる「国土軸」で、ヤンゴンからバガン・マンダレーへと川を遡るとその最上流は中国・インドと国境を接しミャンマーヒマラヤと呼ばれるアルピニストの世界、そこに東南アジア最高峰のカカボラジ山（5881M）が聳えます。管区を貫く国土軸以上に大切にしたいのが隣り合う管区と州が手をつなぎ地域の均衡ある発展を目指す「地域連携軸」、隣の国タイの寺院と遺跡のまちチェンマイ上空から、西北西に向かって遠くバガン王朝の遺跡のまちバガンを望みマグエ管区とチン州を結ぶ「地域連携軸」の先にはビクトリア山が聳えています。



2冊目が、ビクトリア山と御嶽山が表裏一体になって2016年11月に出版した「ストーリーマップー語りかける地図一」で日本語版と英訳版のセット販売、ケースにはストーリーマップは地図のカタチをした物語本ですと書かれています。

ビクトリア山マップは、表紙に 1973 年のワングル同好会のビクトリア山登山の時に写した写真を載せ、世界の三大仏教遺跡に数えられるバガン、その西方チン州の山岳地帯に聳えるビクトリア山。チン族の言葉で「母の山」を意味する山、豊かな自然の中にあるこの山一帯は国立公園に指定されていると書き、「世界地図帳でビクトリア山を探してみる」と云うタイトルで山の名前の由来の話から始まります。

中高生が地理を学ぶものから、書店に並ぶ地図帳まで、日本では「世界地図帳」は多くの出版社が発行しています。その幾つかを手にとって、「ビクトリア山」を探してみても、載っている地図帳はなかなか見つかりません。でも少し分厚い地図帳の索引で探すと、「ビクトリア(ヴィクトリア)」の文字が幾つか並んでいる地図帳に出会えます。

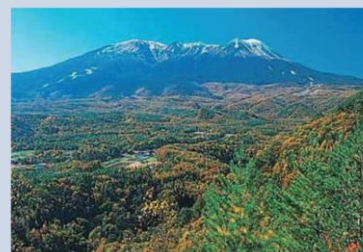
イギリスが史上最も輝いていたといわれるビクトリア王朝、19 世紀後半列強がアフリカ・アジアなどに植民地政策を推し進めた時代に権勢を極めた「ビクトリア」の名は、世界中の多くの土地に残されているのです。ビクトリア島はカナダ、ビクトリア川はオーストラリア、ケニア・タンザニア国境に聳えるアフリカ大陸最高峰キリマンジャロの近くにはビクトリア湖、ビクトリア滝もアフリカにあります。そして「山」は？ ミャンマーとパプアニューギニアにある二つの「ビクトリア山」に、たどり着きます。このガイドマップは、ミャンマー連邦共和国中西部のチン州にある「ナマタン（英名；ビクトリア山）」、ナマタン国立公園の中にある 3,053M の山の登山マップです。

御嶽山マップは、表紙に 1964 年新潮社から出版された深田久弥の「日本百名山」の後記に書かれた「日本人ほど山を崇び山に親しんだ国民は、世界に類がない。国をはじめて昔から山に縁があり…日本人の心の底にはいつも山があった」という言葉を載せ、「日本百名山と御嶽山」と云うタイトルで、次のように紹介しています。



Mt. Victoria situates in the mountainous area west of Bagan, the city known for the stunning Buddhist ruins, in the Chin State of western Myanmar. The mountain is called Nat Ma Taung in Chin language, meaning 'Mother Mountain' and the surrounding area rich in nature is designated as a national park.

Published Nonprofit Organization
Co-operator Frontier Town Atelier
Mingalaba UNESCO
Translation Michiko & Tadashi MORITA



「日本人ほど山を崇び山に親しんだ国民は、世界に類がない。国をはじめて昔から山に縁があり…日本人の心の底にはいつも山があった」

— 「日本百名山」(深田久弥著) の「後記」より —

特定非営利活動法人
編集・発行 ふろんていあタウン工房
協力 木曾ユネスコ協会

「60 御嶽(3063 米) 普通御嶽は日本アルプスの中に入れられるが、この山は別格である。そういうカテゴリーからはみ出している。北だの、中央だの、南だのと、アルプスは混みあっているね、そんな仲間入りは御免だよ、といたげに悠然と孤立している」、そして大きな頂上から裾に向かうおおらかな斜線のみごとさに触れ、「それが一層この山を神々しく見せるのであろう。昔から木曾の御嶽さんは夏でも寒いとうたわれて、信仰の山になったこともうなずける」と書いています。そしてまた「全くここは信仰の山、庶民の山であって、ピッケルに登山靴のアルピニストは、疎外者のような感じである。」とも書かれています。

「日本百名山」の「58 焼岳」から、南にやや離れて聳える「59 乗鞍岳」、さらにそこから同じ位離れ木曾街道を渡ったところに聳える独立峰が「御嶽山」です。北アルプスの主峰「54 槍ヶ岳」「55 穂高岳」から遠く離れているからか、あるいは修験者の像や霊神碑が並ぶ登山道に今でも白装束に金剛杖の姿が見られるアルピニズムとは少し違う雰囲気山のせいか、飛騨山脈の最南端に位置する山なのに、昔から登山者が愛用する「山溪」のアルパインガイドでも、「北アルプス」版から外れて「中央アルプス」版に間借り状態、国立公園・国定公園のエリアにも入らずに、悠然と聳える「孤高の山」です。

深田久弥は「日本百名山」の後記に、「目ぼしい山をすべて登り、その中から百名山を選んでみようと思いついたのは、戦争前のことであった」こと、戦時中一時中断、戦後再び志を継ぎ、「品格」「歴史」「個性」の三つの基準で選定した名山百座を紹介するこの本は、「還暦の年に完成した」と書いています。

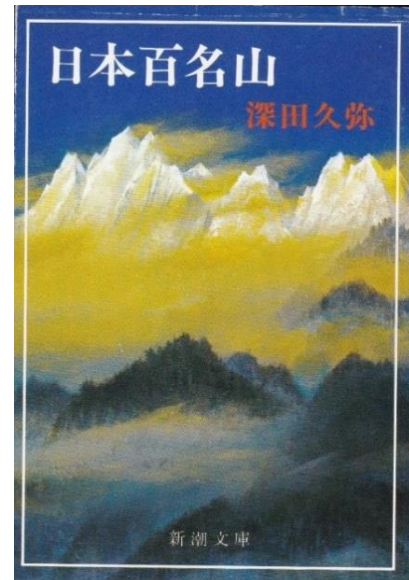
時間を超越した情熱が伝わる山の名著「日本百名山」は半世紀もの間版を重ね、今でもこの本を愛し、日本百名山を目指してその数が増えるのを楽しみながら登っている、山好きの人たちが数多くいます。

深田さんは昭和 46（1971）年 3 月、百名山にはない「茅ヶ岳」の山頂近くで倒れ還らぬ人となりました。

亡くなられて 40 年を超える歳月が過ぎた今書店の山のコーナーの棚には「〇〇の百名山」あるいは「何百名山」などと「名山」のタイトルがついた本が数多く並んでいます。



2. 山の本を並べて瞑想に耽る（その2）

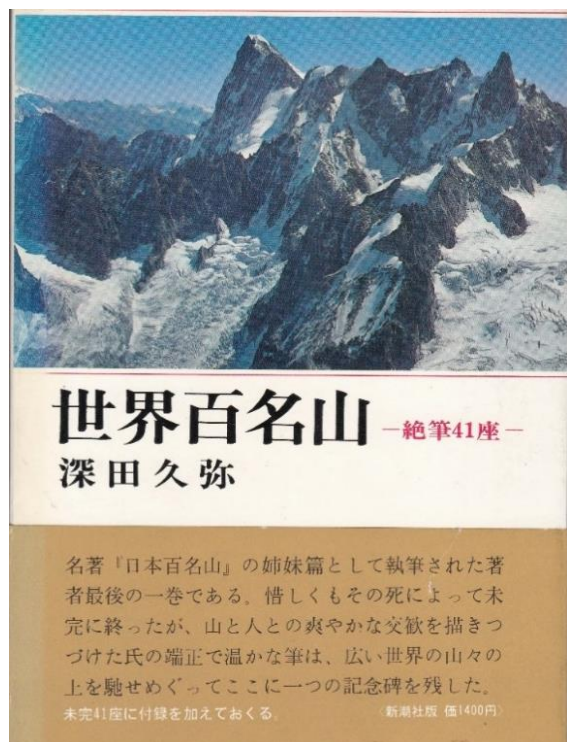


深田久弥の「日本百名山」が新潮社から出版されたのは昭和 39（1964）年7月、東京オリンピックがあった年です。今では百名山を目指して山に登る人も多く、書店の棚には 200 名山・300 名山などいろいろなガイドブックが並んでいます。

（左が新潮社の初版本、右は私が今でも時々鞆に入れて持ち歩いている新潮文庫版です）

「日本百名山」と比べるとほとんど知られていない本ですが、同じ新潮社出版の深田久弥「世界百名山」は、本の冒頭でアメリカの作家ジェームズ・ラムジー・アルマン氏が選んだ世界の百名山をリストアップし、百座選定にあたっての自分の考えを少し述べてから、「予定では毎月順序不同に三座ずつ書き、約三カ年で完了したいが、先のことはわからない。」と書いていましたが、1971 年 3 月に茅ヶ岳で亡くなられた後の 1974 年 11 月に絶筆 41 座と追記しての出版になりました。

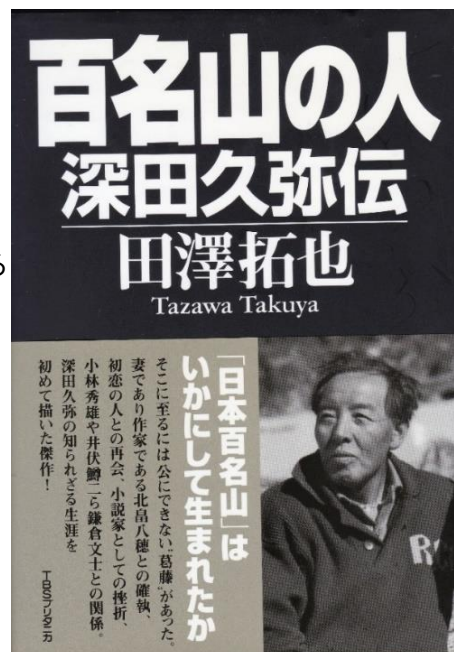
コーカサスのカズベクに始まり、39 座がキリマンジャロ、ペルーアンデスの 41 座で終わっています。



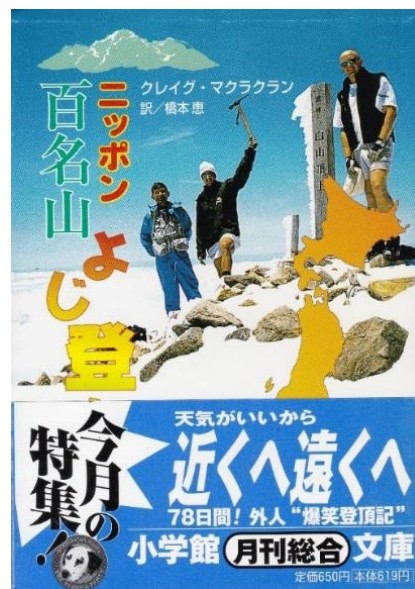
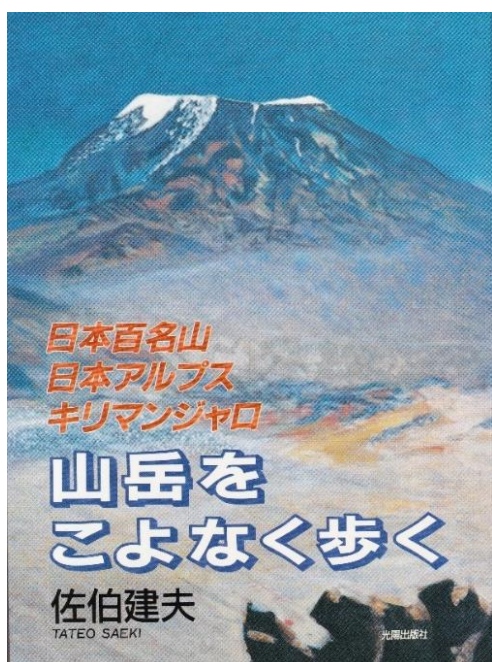
深田久弥の生涯を詳しく追っているのが、2002年3月にTBSブリタニカから出版された田澤拓也の「百名山の人・深田久弥伝」です。

第1章の茅ヶ岳に死すで最後の光景を記してから深田久弥にとって「山」とは何だったのか、日常の生活はどうだったのか知られざる生涯を追っていきます。著者はあとがきで、私は「日本一名山」の人であると書いています。登山靴を買って初めて登った百名山が夏の岩木山、一度はいたきりの登山靴は靴箱の奥深くに眠ったままと書いています。

山男でない作者が書いた傑作本です。



1992年12月出版の「山岳をこよなく歩く」は著者佐伯建夫で紅葉出版社刊、表紙にキリマンジャロの写真を載せています。1967年8月の後方羊蹄山から1991年8月の飯豊山まで百名山の旅を語り、最終章は1986年の「わが青春のキリマンジャロ」で締めるといふ少し変わった百名山本です。私は1994年12月のワングル20周年記念のキリマンジャロ登山に出掛ける前にこの本を見つけて買いました。

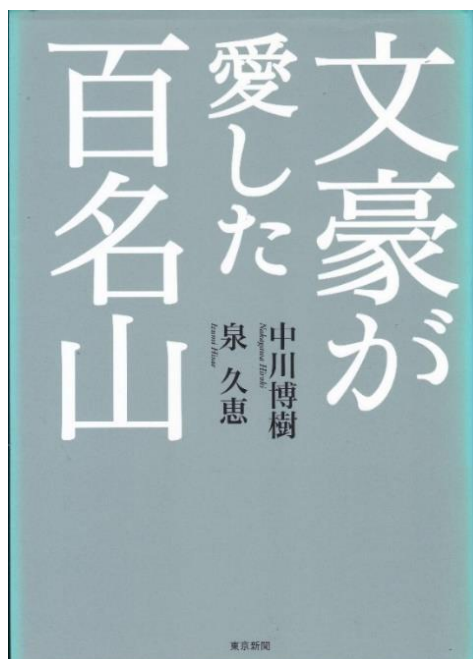


1999年8月出版の「ニッポン百名山よじ登り」、ニュージーランド在住のクレイグ・マクラクランが愛する妻に送り出されて登った日本百名山、1998年出版の英語版を橋本恵訳で小学館から発刊されました。1997年5月18日に登った霧島山から百名山を達成した8月3日の富士山まで、登った順番を地図に書き出発・登頂・下山時刻など丁寧に記録した、ユーモアのセンスあふれる78日間の駆け足百名山！日記です。

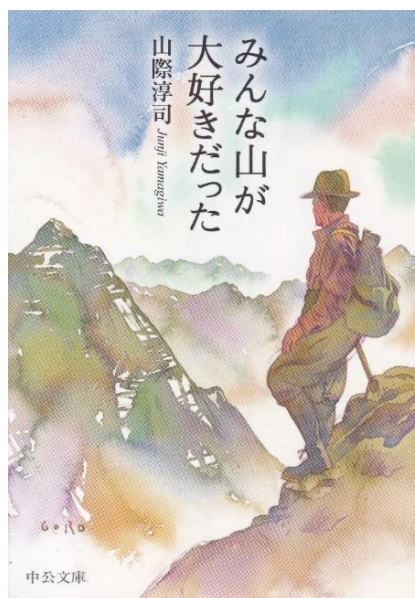
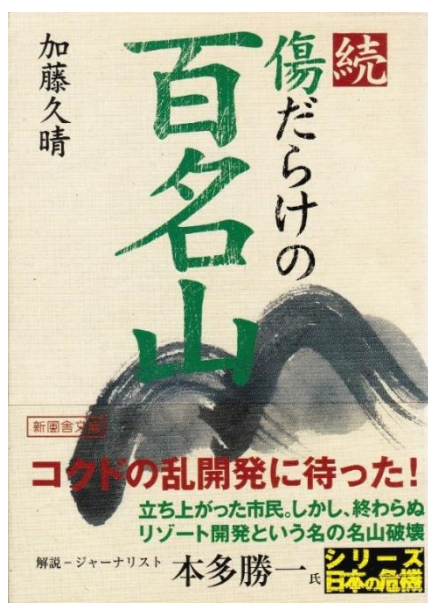
2008 年 7 月出版の「文豪が愛した百名山」、著者中川博樹・泉久恵で東京新聞刊、百名山から 36 人の文豪の山を取り上げて紹介しています。

北の吉村昭の利尻山からスタートし、武田泰淳の羅臼岳と南に下って、夏目漱石の阿蘇山、林芙美子の宮之浦岳で終わります。ひとりで一番沢山登っているのは意外にも幸田文で、男体山・浅間山・立山・薬師岳・富士山に登っています。

太宰治の岩木山や宮沢賢治の岩手山、川端康成の天城山など読む前から作者を想像できる山もあれば、芥川龍之介の槍ヶ岳・穂高岳は何なのだろうと思ひ廻らしたり、とても楽しめる本です。

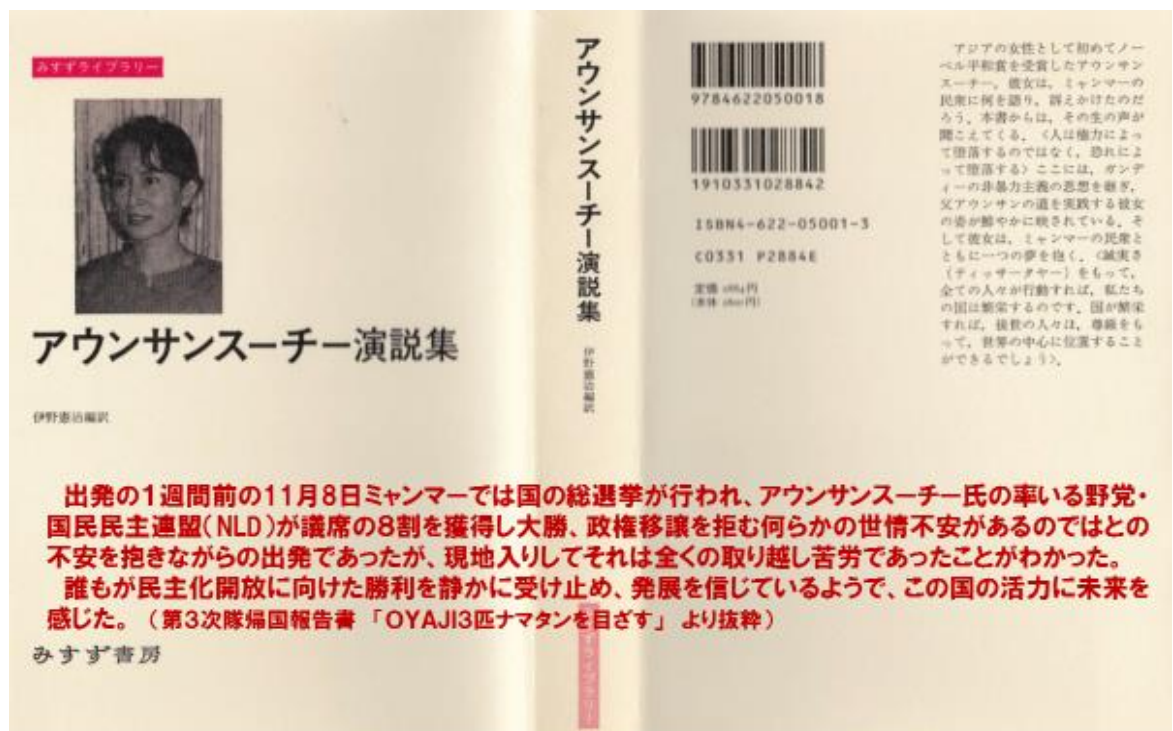


百名山ブームに警告を発している本もあります。「傷だらけの百名山」は、2005 年 4 月・続編 5 月の発刊で著者加藤久晴、新風舎の文庫本で、スーパー林道・自然破壊・乱開発、さまざまな魔の手が日本の山を破壊しようとしていると訴えています。続編の解説は深田久弥と親交があった本多勝一が書いています。



「みんな山が大好きだった」この本は百名山本ではありません。1995 年 7 月に出版された山際淳司の山の本（中央公論新社刊）、原本は 1983 年 9 月発刊の「山男たちの死に方」、先鋭的なアルピニストたちの生と死を限らない哀惜とともに検証した本、1995 年 5 月に亡くなるまえに「みんな山が大好きだった」に題名を変え、亡くなられてから発刊されました。

次の2冊も百名山本ではありません。1冊目は1996年9月伊野憲治翻訳でみすず書房から出版された「アウンサンスーチー演説集」、ふろタン工房のマンマービクトリア山第3次隊がミャンマーに入ったのは2015年11月16～23日、ミャンマー総選挙の1週間後でした。3人の精鋭メンバーの一人森下毅一氏は、帰国報告書「OYAJI3匹ナマタンを目ざす」にその時の気持ちを書いており、その抜粋を表紙にかぶせてホームページのふろタン年表コーナー等で紹介してきました。



もう1冊は「誰も書かなかったオードリー」で2001年8月講談社プラスα文庫からの出版、著者吉村英夫は1940年生まれの映画評論家で多くの映画論本を出しています。1929年にベルギーに生まれたオードリーの第1章から、第24章のスイスのトロエナツでアルプスと湖を見ながら1993年1月20日に亡くなるまでのオードリー・ハップバーンの生涯を詳しく追っています。少女時代の飢餓と貧困をユニセフに助けられたことを終生忘れず、晩年はユニセフ親善大使として戦争や貧困の深刻な地域を訪ね、難民孤児のため夢中で世界を駆け巡っていることを書いています。

「演説集」のアウンサンスーチーさんと「ローマの休日」のアン王女のオードリー・ハップバーンの写真、何となく似ていませんか。 → 瞑想でなくて妄想？

3. 永世中立国へのチャレンジ マッターホルンのあるスイスから学ぼう

「世界百名山」発刊3年後の1977年冬季単独登攀に生涯をかけた日本の登山家長谷川恒夫（1947ー1991）がスイスとイタリアの国境にあるマッターホルン北壁（標高4478m）に登っています。マッターホルンは「世界百名山」の絶筆41座にはありません。残りの59座に入ってしまったのでしょうか。



槍ヶ岳(3180m)



東南アジア最高峰のカカボラジ山(5881m)

尖った山のカタチは「日本百名山」の槍ヶ岳にそっくりです。深田久弥は槍ヶ岳について次のように書いています。「富士山と槍ヶ岳は日本の山を代表する二つのタイプである。一つは斉整なピラミッドで悠然と裾を引いた「富士型」であるのに反し、他の一つは尖鋭な鉾で天を突く「槍型」である。どこから見てもその鋭い三角錐は変わることがない。それは悲しいまでにひとり天をさしている。

ワンダーフォーゲル（渡り鳥）キミは何処の「自然」を目指して羽ばたくのか。

ユーラシアの自然



出典：『コンパクト地図帳 地図から学ぶ現代社会』二宮書店

スイス側の麓にある小さな町ツェルマットは環境保護のため、ガソリン車の乗り入れが禁止され町中に走る全ての車が電気自動車という徹底したエコな町です（私はまだ行ったことはありませんが）。「スイス」と云われて頭に浮かぶのは、一度行ってみたい山岳リゾートであることと、昔からの永世中立国であることです。

1674年に永世中立国を宣言したスイスは、1815年のウィーン会議で関係国が承認、その後1839年のベルギー、1955年のオーストリア、1963年のラオスと続き、1995年のトルクメニスタンは国連総会で承認され永世中立国になっています。

この他にモルドバ、カンボジア、コスタリカ、リヒテンシュタインなどが中立を宣言しています。

スイスは長い歴史を刻んでますが、永世中立国はなかなか増えていません。近隣諸国との価値観の共有、自国が攻撃を受けた時に反撃する自衛力、軍事同盟非参加の義務など難しい現実を乗り越えないのです。

日本は憲法第9条に戦力放棄が掲げられているのだから、永世中立国を目指すべきだという意見が昔から結構ありましたが、最近はそんな声を聴くことも無くなりました。

5月25日に日本の新型コロナ緊急事態宣言は全面解除にはなりましたが、まだ先が見えない状態でコロナ危機は続きます。地球全体に広がる自粛、中国の全人代と米国のトランプの対立、自己中心主義の蔓延、格差社会、犠牲となる最貧国、世界の分断が進み国境の壁が増えていきそうな雰囲気です。

新型コロナ時代はもしかすると文明の転換期になるかもしれません。今こそ日本は、超大国との付き合いは控えめにし、**周辺国と連携した新しい時代の永世中立国を目指す**べきではないでしょうか。そんな時代を迎えているような気がします。

フロンティア精神でチャレンジ！！



それでは山岳リゾートスイスのツェルマットを歩いてみよう！

ツェルマットからマッターホルンを眺めながら、オードリー・ヘップバーンが1985年から暮らし始めたトロシュナ村に向かい安らかに眠るレマン湖畔の小さな共同墓地を訪れる。

ガイドマップを並べました。上からスイス全図・山岳地図・拡大図です。

「では、行ける人から行ってらっしゃーい！」

